

Nassaji, H. & Fotos, S. (2011). *Teaching grammar in second language classrooms: Integrating form-focused instruction in communicative context*. New York: Routledge.

Chapter 8 The Role of Context in Focus on Grammar (pp.121-134)

(番号は適宜つけたもの)

1. Second versus foreign language contexts

1.1 The second language situation

- 第二言語教授とは、英語の場合、英語が母国語または L1 として話されている国での英語教授。
- ESL 環境において、学習者はクラス外でも英語に触れる機会が多くあるため、FonF によるコミュニケーション状況での暗示的文法指導が支持される。
- クラス内での活動は、対象構造が頻出する、タスクベース、またはコミュニケーション教材を使用して、学習者がアウトプットし、正確さに関してフィードバックをもらうことで、効果が増す。
- L2 に関して L1 で話し合い、または自己反省する”*linguaging*”によって対象構造に注意を向け習得を向上させる。ペアまたはグループで行うとさらに効果的である。EFL 環境においても同様である。

1.2 The foreign language situation

- 自国の文化の中で、対象言語がわずかな範囲で用いられている外国語状況では、第二言語状況と比べて母語話者並みの文化的・実用的能力は、最重要ではない。母語話者モデルではなく、有能なバイリンガルモデルが適切である。
- 英語教育の大半は、EFL 環境で行われ、NNS の教師が教え、いまだ文法中心であるためコミュニケーション言語使用が不足しているとされている。
- 中央政府機関によるカリキュラム統一、入試、大人数のクラス、クラス回数の低頻度などの理由から、コミュニケーションインプットを与えることは困難となる。
- 教師の L1 使用については、指示時、文法、語彙説明時に用いられる傾向がある。L2 活動前の L1 による文法説明と、難しい文法項目の復習は、その後アウトプット活動と修正のフィードバックを行うことによって、学習者の文法理解を高める。
- 新しい文法事項に触れる前に、学習者に準備する機会を与え、また活動後に対象文法項目が様々な意味に用いられることを復習することは、学習者の気づきを高める。
- リーディングや語彙教授は、EFL で適していて、インプットエンハンスメントを利用することでさらに強調することができる。リスニングにおいても対象文法を様々な形で含むことができる。

2. Non-native speakers versus native speakers: World Englishes

- 英語が国際言語として広まり、様々な L1 話者が英語を用いる中、NS 教師の重要性は低下している。
- NNS 教師は、L2 学習者の成功したモデルとなる、方略を教えることができる、詳細な言語知識がある、難しい箇所を L1 で教えることができる、などの理由から特にリーディングや英作文の授業で、NS 教師よりも好まれる傾向がある。
- NS 教師は発音、対象言語の文化知識のために好まれるが、文法知識・文法教授に関しては NNS 教師のほうが好まれる。
- World Englishes とは、World English の規範とされる理論的枠組みであり、以下を示す。
 - (1)UK, 北米, Australia, New Zealand などでは話されている英語のみではなく様々な形式の英語がある
 - (2)インドや Singapore などの英語の様に地方版の英語は多様な語用論的使用がある
 - (3)英語は母国語である国のみでなく第二言語または共通語(*lingua franca*)として使用する人々、国家に属する。

これらの理由から FonF 教授では NS よりも NNS が好まれる可能性がある。

3. EFL learner proficiency level

- 学習者のレベルの影響も、学習環境によって変化する。上級の学習者は初・中級者よりも NS の文化的、コロケーションなどの知識を必要とする。
- **teachability hypothesis** とは、学習者の発達段階は、文法教授によって変化させることはできないという理論だが、学習者が次の段階へ進む準備と **FonF** が合致している場合、発達段階に影響を与えることもできる。上級者のほうが **FonF**(例えば **input flood**)で構造に気付き、自身で修正をすることができる。
- 初級・中級者は反応的(**reactive**)**FonF** よりも、先制的(**preemptive**)**FonF** のほうがより効果的。一方上級者は反応的・先制的 **FonF** 両方が効果があるが、特に暗示的である、反応的 **FonF** のほうがより効果大きい。
- 上級者は自動化(**automativity**)のレベルが高いため、対象項目により注意を向けることができる。

4. The age of the learner

- 学習者の年齢も **FonF** において考慮すべき点である。Chomsky の **language acquisition device (LAD)**によると、子供が触れる言語によって基本の文法システムが定まるため、幼いほうが言語習得は成功する。臨界期仮説 (**critical period hypothesis**) では、脳が **L2** 学習を可能とする幼少期の時期が決まっていて、それを過ぎると生得的ではなく認知的学習能力に頼ることとなる。
- **L2** 学習には若い方がよい、反対に子供でも年齢が高い方が効率的に早く学習できる、という、相反する説がある。また、熟達度レベルも影響する。
- **L2** に触れる期間も重要な要因であり、触れる期間が長いほどよい。バイリンガルは第 3 言語も習得しやすい。
- 若い学習者は流暢さがなくても褒められながら話す機会がある一方、大人は学問など複雑な内容を話、恥ずかしさやなど挫折を感じる。
- 学習の最適な年齢については未だ議論されているが、一般的には若い方がよいといわれている。

5. After puberty

- 思春期後の **L2** 学習は、認知プロセスとなる。形式の文法説明や意味把握のための翻訳などの教授法がとられるが、導入時の事前活動と形式を用いるアウトプットをしてそのフィードバックを得ることが効果的である。

6. Classroom learning environments: submersion, immersion, pull-out, and sheltered English

- ① **immersion**: **L2** で学び、**L1**・**L2** 両サポートがある。
最適とされるが、**output** が少ないため正しい文法で **output** できないこともある。
- ② **pull-out**: ほとんどを **L2** で学び、**ESL** 授業も補足として受ける。
補足授業は限られているため **L2** 習得のために十分ではない。
- ③ **sheltered English**: 簡略化された **L2** で学び、数年かけて一般のクラスに移る。
内容は簡単な **L2** で学び、**ESL** 授業も受けるが、十分ではない。
- ④ **submersion**: 一般の授業を **ESL** 授業、サポートもなく受ける。
最も非効果的とされ、多くの生徒は、**L2** を習得せずドロップアウトする。(sink or swim)

7. Conclusion

- 暗示的な形式重視の指導は、アウトプットをしてフィードバックを受けることにより、気づき、訂正へと導く。
- 形式の明示的指導は、**L1** の事前・後の形式説明も効果的である。